絵筆ひとつで海を渡った

石橋和訓 51年の軌跡

START!

和訓の人生が丸わかり!

1876年6月6日、島根県出雲国飯石郡西須佐村（現出雲市佐田町）の農家に生まれる。幼名・倉三郎。

豆知識①

酒好きとして知られる和訓ですが、その嗜好は幼少期から芽生えていたようです。酒の香りを好み、枕元に酒を置いてその匂いを楽しんでいたというエピソードが伝えられています。

幼少期から絵の才能を発揮。須佐神社の宮司であり、南画を心得ていた須佐建真に絵の手ほどきを受ける。

豆知識②

高等小学校卒業後の和訓は、画箋紙を担いで近隣の村々を巡り、屏風や襖に絵を描いては、筆や紙を買うための資金を得ていたとされています。

和訓10歳
尋常小学校卒業後、西須佐村の戸長であった勝部勝四郎が両親を説得し、その結果、掛合高等小学校に進学。

掛合高等小学校を卒業後、須佐の実家で農業を手伝う。

松江に出て、島根師範学校の後藤魚洲に入門。絵の修業に励む。

同時に市内で画塾を開いていた堀樵山のもとで洋画を学ぶ。

和訓16歳
1893年、周囲から推薦を受け、出雲大社の家系である千家尊福男爵を頼って上京。

上京後、洋画家、本多錦吉郎に就き、洋画を研究。

千家男爵、貴族院議員となる松江藩の松平直亮伯爵の紹介を経て、帝室技芸員であった滝和亭に入門。南画を学ぶ。

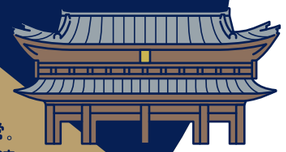
豆知識③

貧しかった和訓は、やむを得ず、鼻緒を荒縄で取り付けた古い下駄で滝邸に通っていたとも言われています。

豆知識④

知恩院にあった絵を模写するため、和訓はあらゆる人脈を頼り、松平伯爵や千家男爵の尽力を得て、宮内大臣から認可を受け、ようやく知恩院所蔵の画幅を内見することが許されたと言われています。

和訓20歳
京都へ古画修業に行く。知恩院や二尊院をはじめとした京都・奈良の寺院で絵を模写して研鑽を積む。



帰京後、広島師団に入営。北清事変勃発。和訓も渡清する。従軍中、師の滝和亭死去。のち、師の雅号から一字を譲り受け「倉三郎」から「和訓」へと改名。

豆知識⑤

「和訓」の読み方は「かずのり」ですが、「わくん」と読まれることもありました。特に郷里の出雲市佐田町周辺では「わくんさん」として現在も親しまれています。

豆知識⑥

和洋折衷の画風を志し、欧米行きを夢見ていた和訓は、留学資金を得るため全国を巡って古書画を売り歩いたとされ、その背景には、下村観山の英国渡航に刺激を受けたこともあったとも語られます。

和訓27歳
1903年、小倉藩主小笠原忠忱の子であり貴族院議員となる伯爵小笠原長幹、米沢上杉家十五代当主の伯爵上杉憲章の欧州留学に随行員として加えられる。中條精一郎、井上匡四郎、三土忠造らとともにイギリスに向けて出発。

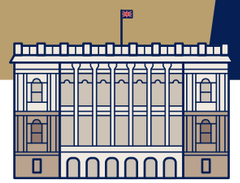
1904年、ケニントンの私画塾に通い始める。

豆知識⑦

下宿先からロイヤル・アカデミーへの多額の電車賃に苦しんだ和訓は、約8kmもの道を徒歩で通ったと言われています。そんな節約生活の中でも、一日ビール一本の飲酒代だけは常に蓄えていたようです。

和訓28歳
1905年、日本人として初めてロイヤル・アカデミー（RA）への入学を果たす。在学中、RA正会員であり、肖像画家として高い人気を得ていたジョン・シンガー・サージェントに指導を受け、影響を受ける。同校ではフランク・E・ベレスフォードらと学び、親交を深める。

ロイヤル・アカデミー在学中から、イギリス国内の公募展へ盛んに出品を続ける。同時に、第二回文展、第三回文展など、日本の公募展にも作品を出品。1910年、RAの研究科を修了。



和訓34歳
1910年5月14日から10月29日までロンドンで開催された日英博覧会に協力。同博覧会はイギリスに日本を強く印象付け、同国の日本美術コレクターを拡大。

1918年、ともにイギリス留学時の随行員をつとめた中條精一郎らが発起人となり「石橋和訓肖像画会」が結成される。賛助員として犬養毅、松方正義、渋沢栄一など政財界の大物が名を連ねた。

1919年、松方幸次郎による「共楽美術館」建設構想について黒田清輝や、バーナード・リーチらと協議を行う。

和訓42歳
1918年、渡英後初めて帰国。第一次世界大戦でイギリスへ逃れてきたベルギーの画家たちの窮状を救うチャリティー展覧会「欧州大家絵画展覧会」を日本橋三越呉服店にて開催。フランク・ブラングィンの版画104点その他を展示。

和訓44歳
1920年、再渡英。翌年、日英間の美術交流への貢献が認められ、芸術家による紳士倶楽部、チェルシー・アーツ・クラブに会員として迎えられる。

豆知識⑧

一度目の帰国の際、和訓は周囲の勧めもあって禁酒を誓ったそうですが、再び渡英した1922年、サロンに出品予定だった肖像画の出来に納得がいかず、制作のために再び酒を口にしたという逸話が残っています。この"解禁"によって作品が完成に至ったとも語られています。

和訓47歳
1923年9月2日、関東大震災の翌日に帰国。東京の渋谷町下渋谷常盤松（現在の渋谷区渋谷4丁目）にアトリエを築き、肖像画家として活動。

1928年5月3日、急性肺炎のため下渋谷で死去。享年51歳。

GOAL!

2026年
島根県立美術館にて
石橋和訓展 開催

用語解説

◆帝室技芸員

明治23（1890）年、美術工芸作家の保護と制作の奨励を目的として宮内省によって設けられた顕彰制度。帝室技芸員は、皇室の美術・工芸品制作を勅命により行い、博物館総長の諮問に応じるなどの役割を担う名誉職でした。

◆ロイヤル・アカデミー

英国の王立美術団体。1768年、諸美術の育成・向上を目的として設立されました。美術学校を経営すると同時に、展覧会も開催し、美術界において強い権威を持っていました。1900年代初頭は、ロイヤル・アカデミーが伝統的なアカデミズムを基盤とし依然として権威を保ちながらも、新たな美術潮流の流れの中で、変化の波に直面していた時期であるといえます。

◆文展

1907年、日本美術界の派閥や流派の統合を目指し、第一回文展（文部省美術展覧会）が開催されました。正木直彦や黒田清輝らが関わった、日本初の官設美術展で、日本画・西洋画・彫刻の三部を設け、褒賞や国による買い上げ制度を通じて新人芸術家の登竜門ともなりました。

◆共楽美術館

松方正義の三男・松方幸次郎は、第一次世界大戦中のロンドン滞在を契機に美術品収集を開始しました。1916年以降、約10年にわたり欧州各地を巡り、絵画や彫刻、家具、タペストリーなどを収集。帰国後、公開のため「共楽美術館」を麻布に計画し、設計はブラングィンが担当しましたが、1927年の経済恐慌の影響を受け実現にはいたりませんでした。この時に収集された「松方コレクション」が国立西洋美術館の母体となっています。

［参考文献］
●河邊榮養『石橋和訓画伯小伝』（未公刊、「島根県立石見美術館 研究紀要」第4号、第5号に全文掲載）
●真住貴子「石橋和訓のイギリス時代」『島根県立石見美術館研究紀要』第2号、2008年、19-44頁
●林みちこ「石橋和訓氏肖像画会」について」『近代画説』第28号、明治美術学会、2019年、150-163頁
●柳原一徳「石橋和訓作《岡倉由三郎肖像》をめぐって」『島根県立美術館研究紀要』第3号、2022年、63-80頁